

森泉弘次

（1）少年時代の聖書との出会い——わたしとキリスト教とのかかわりは敗戦直後の小学校5、6年生頃に始まる。敗戦は疎開先の埼玉県大宮市の北小学校5年生のときだった。戦後すぐ東京北区の豊島六丁目の長屋に引っ越してきた。そのとき運んできた家具の中に、明治時代に翻訳出版されたと思われる文語訳新約聖書があった。その後引越しを繰り返すうちに失くしてしまったが。父が若い頃買い求めて読んだらしい（父は亡くなる前に後記の小田島先生から受洗した）。今手元にある、1974年聖書協会発行の引照付文語聖書の本文とくらべるとかなり古拙（アルカイック）な印象が残っている。確か人物名や地名にサイドラインがついていた。5、6年生の頭で理解できる文章ではなかったが、声に出して読むと厳かな感じがした。同じ頃、「井戸の穴から」とかいう題のヨセフ物語の文庫風の訳本もわが家で見つけた。これはたいへん読みやすい本で何度も読み返した記憶がある。「井戸の穴」とは、放牧の仕事で帰りが遅い兄たちの安否を確かめるよう父から命じられた弟ヨセフが、彼への父の特愛を妬む兄たちによって投げ込まれた「井戸」である。

（2）裏切られた中学の入学式の日——わたしの生涯の恩師故小田島嘉久先生（青山学院女子短大名誉教授）の奥様紀子（としこ）様も少女時代にこの本を愛読したとわたしに語ったことがある。不思議な御縁である。小学生時代に読んだこの二書によってキリスト教に良い印象をもって北区立王子中学校に入学した。新制中学一期生である。わたしにとって入学式日は悪い印象がある。昭和15年4月1日の赤羽小学校入学式朝、前夜興奮して寝つかれなかったわたしはオネショで目を覚まして家族に笑われた。中学の入学式は最悪で、式後校庭の草むしりをしていたら、突然5、6人の悪童に囲まれ、日産化学引き込み線（鉄道）の線路上に連れて行かれて殴打されて倒され、顔面をしたたかに蹴られた。理由は言われなかった。たぶん「あいつ生意気そうだ」ぐらいの理由だったろう。後で知ったが、その中には感化院（少年刑務所）帰りの不良が二人いた。一人は名前を忘れたが、高校生のように大柄で力が強かった。もう一人はMという喧嘩上手だった。王中は少年野球の強さで有名だったが、その名ショートになるTもいた。そのとき受けた顔の打撲症が原因だったであろう。直後にひどい鼻炎にかかって長いこと医者通いをする羽目となった。兄たちに裏切られたヨセフの気持が少しわかったような気がした。ヨセフも将来父や兄たちが自分に従うようになることを暗示する夢を兄たちに無邪気に話す生意気な少年だった。

（3）暴力で立つ者は暴力で倒される——この苦い経験がきっかけで、強くなろうと、小五のときから道場通いをしていた柔道の稽古に一層熱がはいった。このリアクションは柔和なヨセフとは違う。その結果、二年生になる頃には喧嘩に強くなり、感化院帰りの連中から敬遠されるようになった。しかし二年生の半ば頃、白井義男（戦後最初のボクシング世界チャンピオン）道場で正式にボクシングを習っていた男を含む三年生数名を相手にこちらは二人で闘って、コテンパンにされたので、上には上があるなど腕力修行はあきらめ、勉強に打ち込むようになった。

(4) 信仰の先達から向学心を——英語の石原先生（女性）はクリスチャンで、卒業後英語の「主の祈り」とわかる長い英文を暗唱させた。文部省による管理もずいぶん寛大な時代だったと思う。あらためてキリスト教に対する憧れがよみがえった。昭和25年3月中学を卒業して製紙会社に就職した。軍服縫製工だった母が戦時中4人の子を残してすい臓炎で亡くなり、高崎の軍需工場で働いて子供たちを養っていた父は敗戦で無職となり、闇市の露店魚屋や河岸（ルビ・かし）人足などをして一家を支えていた。父の苦勞を思うと、長男のわたしは早く就職して家計を助けたかったのである。しかし通勤時、登校途中の高校生の群れに遭ううちに、向学心がこみあげてくるのを感じ、辛かった。そんなとき伝道集会のポスターを見て、東十条教会に通うようになった。4月下旬頃だからその年のイースターはもう過ぎていたであろう。20代の会員十数人からなる教会だった。その内の二人（小学校教師のTさんと歯科大学生のSさん）から刺激されて、英語と数学の自学自習を始めた。彼らの指導で英訳新約聖書も読めるようになった。もう通学途中の高校生に会っても、引け目は感じなかった。わたしにとって信仰の目覚めと向学心の復活は同時だったのである。これが事実上わたしにとっての最初のイースター経験だった。

(4) イースターの語源——イースターの語源はゲルマン語のアウストロンで、ゲルマン神話の光と春の女神エアストロと関係がある。ラテン語のアウローラ（オーロラ、極光、曙光）とも関係がある。太陽が昇る東（イースト）をも含意するのは無論である。電気がなかった太古の夜は文字通り漆黒の闇であり、「手で触れられるような（濃い）闇」という言葉が出エジプト記10章21節に出てくる。実感がある。夜間に行われた出エジプトに、神が「寝ずの番」（出エジプト記12章42節）をし、「火の柱」（同13章21, 22節）となって先導したことは、イスラエルの民にとってどれほど心強かったことか！

(5) 鮮烈なイースター経験三つ——わたしにとってイースターの鮮烈な経験は三系列ある。下石神井教会の10年近いCS校長時代、毎年春、近所の井草の森公園に30名近い子供たちとその親と共に集まってイースター礼拝を守り、美味しいトン汁朝食を頂いたことが一つ。校長が自作のイースターのイラストを見せながら、主の十字架の死を目撃して悲嘆に沈んだ2000年前のクリスチャンにとって復活の主との再会がどれほど大きな喜びだったかを話した。もう一つは、最近数年間阿部園子さんの大森聖アグネス教会で、神崎司祭の懇切な導きで守った「十字架の道行き」の儀式である。わたしたち夫婦にとって45分くらいかかるこの厳粛な儀式と終わった後に聖アグネス教会の信者さんたちと一緒に頂く美味しいランチが最高のイースター礼拝の経験だった。さかのぼって中卒後の4月下旬に通い出した東十条教会での鮮烈な思い出についてはすでに触れた。小二になった昭和17年4月30日の母の死、家族から離れた長い群馬での学校疎開と大宮での縁故疎開など、戦後の苦勞や悲しい経験のあと教会の交わりに見出した希望の光はイースターという言葉は知らなくとも、繰り返すが、わたしの若い魂にとって事実上の復活祭だった。ヨセフ物語の精読が良い準備となった。少年時代のことを長々と書いたが、この時期の辛い試練が回心後の計り知れぬ喜びを可能にした善き土壌だったと気づいたからである。

